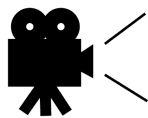
2011年 会報 夏号

No.31

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。

シティ･ライツ代表　平塚千穂子

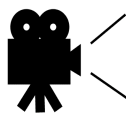
初夏の候、皆様いかがお過ごしでしょうか？

6月4日の映画祭から、早くも1ヶ月。今年の映画祭も、皆様のご支援のおかげで、延べ800人もの方々にご来場いただき、無事盛会のうちに幕を閉じることができました。本当にありがとうございました。

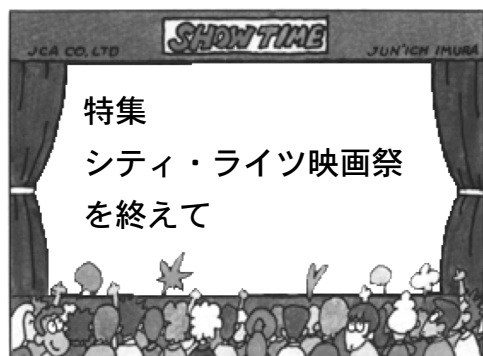
今年は、シティ･ライツ設立10周年ということで、10年を振り返り、感謝をこめて、未来につなげる映画祭にしよう！と、「音声ガイド紡いで10年　たくさんの出会いにありがとう」という副題をつけましたが、この映画祭を経て、改めて「たくさんの出会いにありがとう」を実感した次第です。

まず、たくさんの映画との出会いがありました。映画祭パンフレットには、これまでの同行鑑賞会の実績をまとめたページをつくりましたが、2001年、隣に座って耳元でコソコソガイドをしていた頃から、2002年にFM送信機を導入し、映写室からのライブガイドが定着した今（6月19日開催の「パイレーツ･オブ･カリビアン生命の泉」鑑賞会）に至るまで、実に３２４回の同行鑑賞会を行い、視覚障がい者の皆さんと一緒に、映画を鑑賞してきたことになります。また、調布映画祭では、2002年の「風と共に去りぬ」「男はつらいよ知床慕情」から、今年3月の「マルタのやさしい刺繍」「オーケストラ！」「沈まぬ太陽」までで、29本。調布シネサロンも、2002年の「上を向いて歩こう」から、今年6月21日に上映された「伊豆の踊り子」までで、26本の旧作映画に音声ガイドをつけてきました。また、映画会社の依頼を受けて、劇場興行から一般の市販･レンタルDVDに音声ガイドをつけた作品は、「星に願いを。」から「幸せの太鼓を響かせて」までで10作品。2008年からはじめたCity Lights映画祭では、先日終わった第4回映画祭までで、9本。その他にも、早稲田大学人権教育委員会と共催でバリアフリー上映会をおこなったり、立教大学ボランティアセンター主催の「誰でも楽しい映画会」、したまちコメディ映画祭、日本点字図書館や、ロゴス点字図書館主催のチャリティ映画会、武蔵野市社会福祉協議会主催の七夕の集い、北区中央図書館主催のバリアフリー上映会など、様々なイベントで、音声ガイドに協力し、20作ほどの映画に音声ガイドをつけました。よって、同行鑑賞会をはじめ、これらの映画祭や上映会をすべて合わせると、400本以上の映画に音声ガイドをつけてきたことになるわけです。スゴイですねー。

これだけの活動を、10年続けて来れたのは、ひとえに会員の皆様のご支援と、様々な活動で、自分の持てるスキルを発揮し、映画への愛情をそそぎ、視覚障がい者と晴眼者との友情を育んでくれた皆様のおかげです。つまり、もう一つのたくさんの出会いとは、素晴らしい、たくさんのメンバーとの出会いです。10年間、いろいろなことがありましたが、どんなに大変なことがあっても、必ず誰かが手を貸してくれて、一緒にどうしたらよいか考えてくれました。そしてたくさんのアイデアと情熱を、形にしてくれました。第4回映画祭では、かつて一緒に活動していたメンバーも、会場に駆けつけてくれて、今でもシティ･ライツを応援してくれていることを知り、とても暖かい気持ちになりました。また、当日ボランティアスタッフが、それぞれの持ち場で、フル回転に力を発揮してくれていて、とても頼もしく、有り難く思いました。そして、シティ･ライツが多くのメンバーに支えられていることを改めて実感し、共にこの道を歩んでこれたことを、とても幸せに思いました。

私は、いつか常設のバリアフリー映画館をつくる！という夢を、今も変わらず胸に抱き続けています。互いを支え合える、この素晴らしい仲間がいれば、必ず実現できる夢だと信じています。何年先になるかわかりませんが、その時を迎えるまで、これからも、変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。私も健康に気をつけて、その日まで一緒に、がんばっていきたいと思います。

～同 行 鑑 賞 作 品～

このコーナーでは、近日（4～6月まで）に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- 英国王のスピーチ　4月10日　新宿武蔵野館
- オーズ・電王・オールライダー　レッツゴー仮面ライダー　4月23日　川崎チネチッタ
- ゲノム15 音声ガイド付きプロレス大会　4月28日　東京ドームシティホール
- 名探偵コナン　沈黙の15分（クォーター）5月8日　ユナイテッドシネマとしまえん
- まほろ駅前多田便利軒　5月15日　ユーロスペース
- 木洩れ日の家で 5月30日 岩波ホール
- 八日目の蝉 5月29日 ユナイテッドシネマとしまえん
- 幸せの太鼓を響かせて～インクルージョン～ 6月12日　角川シネマ新宿
- プリンセス　トヨトミ　6月12日 ユナイテッドシネマとしまえん
- ブラック・スワン　6月18日 川崎チネチッタ
- パイレーツ・オブ・カリビアン　生命（いのち）の泉<3D>　6月19日 川崎チネチッタ
- 鎌倉観光＆映画企画 第2弾「天国と地獄」 6月26日 川喜多映画記念館

去る６月４日、シテイ・ライツ最大のイベント「シテイライツ映画祭」が行われました。設立１０周年ということもあり、エナジーとカロリーのあふれるフェスティバルとなりました！！

上映作品の製作に携わった方のコメントと、鑑賞された方々の感想をいかに掲載いたします！

「100人の子供たちが列車を待っている」のガイドを作成して

（柏 菜穂子）

私は、映画「100人の子供たちが列車を待っている」の音声ガイドを作成しました。私にとっては、昨年、所属するシブヤ大学音声解説ゼミで上映会を行った「ベンダ・ビリリ！～もう一つのキンシャサの奇跡～」、そして今年３月に開催したドラマ「モテキ」上映会に続く3回目の音声ガイド作成。まだまだ分からないことも多く、パソコンの前でうんうん唸りながらの作成となりました。

この作品は、映画教室を主宰する女性教師アリシアと教室に通う子供たちのふれあい、子供たちが教わる映画の原点、ピノチェット政権下で生きるチリの人々の日常などが盛り込まれているすばらしい映画です。そして、私の担当パートは最後の約10分間―映画「父／パードレ・パドローネ」の少年のアップが映るシーンから、エンドロールまででした。

今回、一番難しかったのは、子供たちがバスに乗って街の映画館に行くシーンです。この約6分間、セリフはたったひとつ―バスの中ではしゃぐ子供たちが声を合わせて言う「チチチ！リリリ！ピノチェット辞めろ！」のみです。あとのほとんどは、バスが走るシーンと車内の子供たちの様子が繰り返し映されるため、気を抜くと「バスは…」「～な子供たち。」といったガイドばかりになってしまい、何度も何度も推敲を重ねました。結局、なんとか形にはなりましたが、原稿を提出してからも、あれでよかったのかしら…と考えていました。

お客様がいらっしゃるか気が気でなく、上映中は右を見たり左を見たり。特に自分の担当パートはどきどきしっぱなしでした。いくつか悔いの残る部分はありましたが、素晴らしいナレーションの方のお力で、リカバーできていたのではないかと思います(ありがとうございました)。以上、至らぬ点だらけの音声ガイド作成となりましたが、とても勉強になりました。来年の映画祭でも、また音声ガイド作成に関われたら嬉しいです。

「蝶の舌」音声ガイド余話

（山崎玉代）

受信メールの履歴を振り返ると、「蝶の舌」MLの履歴は2月20日に始まっています。モニターと進行役を含め10人でスタート！のはずでしたが、初参加予定のお二人が欠けてしまい、リーダーも含め7人で分担することになりました。第一回の勉強会を終え、二回目の3月11日。出席者が少ないため、いつになく早く終わって三田の会館を出ようとした時、あの大揺れがやってきました！（トイレにいたSさんを外までガイドしてくださった聴覚障害の方、本当にありがとう！） 結局その後はメンバーが集まることができなくなり、新人さんにとっては難しい在宅作業になってしまいました。

新しい監修役をお願いし、ようやく原稿が固まったところで、字幕朗読班の出番です。檀さん率いる素晴らしい声優さんたちのおかげで、“字幕読み”というより、“吹き替え”に近い完成度に仕上がりました。それにしても、これだけの人材が手弁当で集まってくださるなんて、シティ・ライツの底力はすごい！と改めて感激したものです。

この映画の背景は、共和派の台頭を恐れる旧守派（フランコ派）が、村人たちの生活を分断し内戦へと突き進む、1936年の冬の終わりから夏にかけての季節。社会の大きなうねりの中、家族を守るために、モンチョの父親のように、仲間を裏切ってしまった男たちも少なくなかったことでしょう。遠藤周作の『沈黙』で、自分が棄教すれば多くのキリシタンが許されると知ったロドリゴが、踏み絵に足をかけようとする時に、イエスが「踏むがよい。お前のその足の痛みを、私がいちばんよく知っている。」と語りかけるシーンがありますが、共和派の仲間に、泣きながら罵詈雑言を浴びせるモンチョの父に、ロドリゴの姿が重なりました。

グレゴリオ先生は、「なぜ？」「どうして？」と問いかけながら、子供たちに自分で考える力を育てようとし、病弱で引っ込み思案だったモンチョは、先生の翼の下で多くのことを学んでいきます。蝶の舌は、普段はくるりと渦を巻いて隠れているけれど、蜜を蓄えた花を見つけた瞬間、するりと伸びて花の奥深くまで入り込む。君にとっての蜜は何？大切な花を見つけたら、ちゃんと舌を伸ばして蜜を吸うのだよ、と先生は教えてくれたはずなのに、それが先生に対するののしりの言葉になろうとは…！映画祭で久しぶりに再会した映画を聴きながら、改めて良い作品に巡り会えた幸せを感じました。

「大誘拐 RAINBOWKIDS」ガイド制作に参加して

（田中京子）

第4回シティ・ライツ映画祭の当日、私は晴眼者の友人と共に観客席にいました。第1回の時も観客として、小さな会館でパイプ椅子に座り、雑然とした雰囲気の中で映画を観ていました。会場を江戸東京博物館に変えた第2回、第3回は、上映作品のガイド制作や字幕朗読に参加するだけでは飽き足らず、会場スタッフとして汗を流しました。毎年、シティ・ライツに集う人たちの熱気と活動の成長ぶりには目を見張るものがあります。

今年は『大誘拐』のガイド制作チームに加わりましたが、勉強会直前に大震災が起こり、鳥取に住んでいる自分を除く関東のメンバーが混乱にみまわれました。不安と時間に追い立てられる中で、強力なリーダーのもと、メーリングリストと在宅作業でガイドは作られていきました。一昨年もガイド制作チームに参加しましたが、作業の手法がさらに効率よく洗練されてきた事を実感しました。

シティ・ライツとの関わりは勉強会の見学に始まって、かれこれ6年以上になります。私自身が音声ガイド制作を始めたのは5年前からで、時を同じくしてメーカーの取扱説明書などを制作するテクニカルコミュニケーターの仕事につきました。音声ガイドも仕事も「必要にして充分な情報を、全ての人に分かりやすく伝える」本質は変わりません。やればやるほど、これは全ての人に利用される価値があるスキルだと感じています。

ガイド制作の現場の雰囲気は、なごやかで厳しい、の一言です。でも楽しいのは、障害者だ健常者だという垣根を引っこ抜き、踏みこえて、みんなで映画を味わいつくす事です。音声ガイド付き映画は初めて、という友人に感想をたずねてみると「とても新鮮に目で感じ、聞くことで深く映画を理解することもできた。何より皆さんが楽しんで取り組んでいることが一番。」というコメントをもらいました。映画鑑賞だけでなく、みんなで楽しんで元気になろう！という事が伝わったことをとても嬉しく思います。

■ 映画祭のお客様からの声

（野村　真也）

このたびは、設立10周年おめでとうございます！昨年、シティ・ライツの活動に多くのヒントを得て、自分たちでも音声ガイドを作成しました。そして、MID_ACT（ミッド・アクト）と名付けた上映会を催しましたので、そのときの経験も踏まえて映画祭の感想を述べてみます。

何より驚いたのは、隠れた傑作「100人の子供たちが列車を待っている」を取り上げたこと。描かれるのは、子供たちが映画の歴史を体験的に学んでいく様子です。その映画教室の教材に、さりげなく音声ガイドを加えようとしたのではないか。そんな主催者のチャレンジ精神を感じました。

トークショーで明らかになったのは、よい脚本から素晴らしい映画が生まれるように、うまい音声ガイドには映像翻訳の技術が欠かせないという点です。新楽さんのツボを抑えた話ぶりは、７～８年前、日本映像翻訳アカデミーに通っていたころからのものです。一方、当時は考えもしなかった音声ガイド養成講座が開講されているのですから、時代は確実に進んでいると言えるでしょう。

しかし、映画へのアクセスが困難な人々が、まだまだ多いのも事実だと思います。そんな中で、被災した岩手の映画館「みやこシネマリーン」へすかさずサポートを申し出たあたりに、首都圏にとどまらない視野の広さとフットワークの軽さを感じました。

「映画は、暗闇の中で、誰もが等しく楽しむべきもの」。

ミッド・アクトでの謳い文句が再確認できた１日でした。今後も期待しています。

（駒形　美知子）

こんにちは！風船です。

第4回 City Lights 映画祭　シティ・ライツ設立10周年記念　音声ガイド　紡いで10年　たくさんの出会いにありがとう（チラシから引用）

2011年６月４日、両国の江戸東京博物館ですばらしい映画祭が開かれました。実行委員の皆様、当日お手伝いいただいた皆様、全ての関係者の皆様、本当にありがとうございます。なにもお手伝いできなかったので、拙い感想を寄せさせていただきます。

「映画祭を思い切り堪能しよう！」と言う事で、事前に１日券を購入し、昼食を買って会場に向かいました。終日ご一緒してくださった方に大感謝です！お会いしてすぐに、休憩時間に10周年記念Tシャツを買いたい、お昼を食べたいなど、わがままなスケジュールを伝えました。

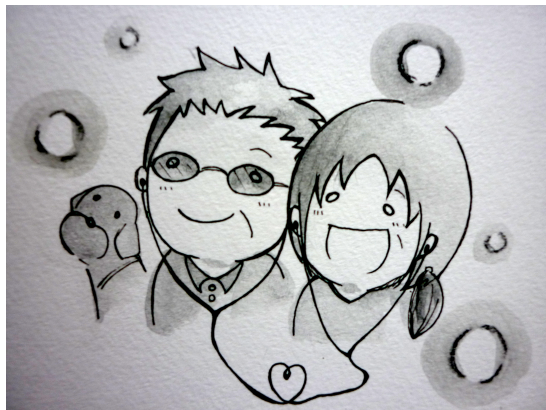
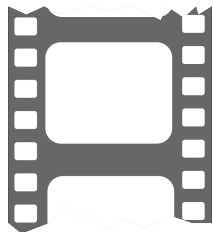
会場受付で元気な実行委員の皆様に迎えられ、とても嬉しかったです。会場に入ると猪木さんのメッセージが流れていました。暖かなメッセージに思わずキュン！っときました。

最初の映画　『100人の子供たちが列車を待っている』 。不思議なタイトルに引かれて観始めました。うまれつき目が悪く、光と色は分かったけれど、物の形などが認識できなかった私にとって、絵から映画になっていく様子はとても新鮮で、心踊らせていました。子どもが変わると大人が変わっていく様子、デモや貧困が日常な事など、たんたんと描かれていて、映画館に映画の芋虫が向かうところはこちらまでにこにこしてしまいました。

トークショーでは実際の映像翻訳の様子が紹介されて、とても有意義でした。休憩時間に赤いTシャツに着換え、超スピードでお昼を食べ、会場に戻りました。

２作目の『蝶の舌』 シティ・ライツでこの鑑賞会をしていたとは、さすがと思いながら観ました。観終わってから、モンチョの叫びがグレゴリオ先生に届いて欲しいと祈らずにはいられませんでした。

休憩の後、外から会場に戻ると場内の雰囲気ががらっと変わっていました。岩手の宮古シネマリーンの支配人の話にエールを送った後、『大誘拐 RAINBOWKIDS』を観ました。岡本喜八監督の名作、だれも傷つけずに思いをはたす老女に脱帽でした！登場人物の優しさがすてきでした。

とても満ち足りた１日を過ごすことができました。今から来年の映画祭を楽しみにしています。

インタビュー：『人生、ここにあり』吹替え声優にチャレンジ！

マツタカこと松田高加子です。 7月23日から銀座シネスイッチを皮切りに全国で公開予定のイタリア映画「人生、ここにあり！」の音声ガイドを制作しました。そして、吹き替えの声優さんとして、シティ・ライツのメンバー２名にチャレンジをしてもらいました！

「人生、ここにあり！」は、1978年イタリアで施行された通称“バザリア法“により、精神病院の撤廃が進められていた時代の実話がベースとなっており、患者だから簡単な仕事を。ではなく自立したイチ労働者として働きながら、医師の指導のもとに投薬量を減らし、人間性の回復をめざす過程を描いていく作品。日本ではとても難しい題材と捉えられがちなものを、コメディタッチにユーモアを配しながら、重要なメッセージを伝える素晴らしい映画なので、みんなで一緒に楽しみながら、新しい発見をしましょう、という気持ちをこめて、音声ガイドも製作されるに至ったので、配給会社さんと相談して、（字幕版のイタリア語の映画なので）吹き替え版を作成する際に、「一緒に観る」をもう一歩踏み込んで、「一緒に作る」ところにもチャンスを作って、シティ・ライツのベテランメンバー、しろさんとウキちゃんにもお手伝いをしてもらおうということになり、お二人に声優としての出演をお願いをして快諾をいただきました。お二人にメールインタビューをしましたので、ここにご紹介いたします。

Q1：どういう所で、どういう雰囲気の中で収録をしたのですか？

【しろさん】：普段アニメや洋画の吹き替えに使うアフレコスタジオでした。意外に狭いのでびっくり。映画の画面とディレクターブースの正面に役者が並ぶ形で収録が行われました。今回の作品はキャストが多く、出演箇所でない声優さんたちが後ろで待機している中で収録したのでかなり緊張。なかなかOKが出なかったりすると、他のキャストさんをお待たせしてしまうという焦りから更に緊張（滝汗）。でも皆さんとても雰囲気がよい方たちばかりで、楽しく収録できました。

Q2：どういう風に収録したのですか？（セリフの覚え方、タイミングの件など）

【しろさん】：セリフは二言だけだったので、自分で書いた小さい点字メモを持って行きました。
タイミングはシティ・ライツの字幕読みの時同様に、原音を聞きながらと、肩をたたいてもらうというやり方を併用。
【ウキちゃん】：とりあえず点字台本に起こしました。前もって、点字になおしておくことで、いざ収録の時に読みながらできるかなぁと考えました。ただ、実際、私の担当部分は、そこまで長いセリフは多くありませんでしたし、セリフの量もそんなにはありませんでしたので、収録直前に、何度も自分のセリフを繰り返し暗唱して、本番の収録の時は、点字を読まずにセリフをしゃべりました。点字台本は結局、アンチョコとして大いに役に立ちました。収録は、なんとプロの声優さんと一緒にスタジオ入りしました。まずヘッドフォンから聞こえてくる映画のシーンの原音を頼りに、自分のセリフをどこでしゃべるのかを確認します。その時、自分のセリフが聞こえてきたら、すぐ晴眼者に肩をたたいてもらって知らせてもらいました。そうすることでセリフをしゃべりだすタイミングをはかります。その後、準備が出来たら本番の収録です。いざやってみると、私のしゃべる速度が遅すぎて、原音に間に合わなかったり、キャラクターを作りすぎて、セリフが浮いてしまったりと、なかなか一回で収録することは難しかったです。

Q3：やってみてどうでしたか？

【しろさん】：とにかく貴重な体験でした。また機会があったら是非挑戦したいですね（笑）
【ウキちゃん】：セリフをしゃべっているのはほんの２、３秒くらいの出来事なのですが、プロの声優さんと会話のキャッチボールというか、掛け合いができた瞬間がとても心浮き立ちました。こんな経験はなかなかできないなぁと、本当にうれしく思いました。

Q4:最後にそれぞれ一言どうぞ！

【しろさん】:若い頃からやってみたかった声優さん、この年になって願いが叶うとは思いませんでした。障害者になってほとんどの事は諦めて、後は縁側でこぶ茶生活だと思っていましたが、生きていれば意外な所に意外なチャンスがやってくるんですね。
【ウキちゃん】:かつて、「ブラス！」という映画の字幕朗読をシティ・ライツで収録した経験や、日頃からこうばこ会（視覚障がい者のトークパフォーマンス劇団）の公演で朗読の練習をしていたおかげか、収録はまんずまんずの出来だったと思います。まだ、出来上がった自分の声は聞いていないので、もしかすると、思いもかけないしゃべりっぷりで、びっくりしてしまうかもしれません。なにはともあれ、映画が公開されるときを楽しみにしています。

お二人が何役をやったかは、ここではあえてナイショにします。ただ、お二人の収録後に配給会社の人だけでなく、プロの声優さん、スタジオのエンジニアさん達から「お世辞抜きにとてもきれいな声で、上手でした。」と絶賛されるのを聞いて、私まで誇らしい気持ちになるくらいお二人は堂々と声優さんと渡り合っていました。
「人生、ここにあり！」音声ガイド付き上映は、期間中3回の開催を予定しています。詳細が決まり次第メーリングリストでお知らせしますので、是非お二人の声を探しに来てください！

何回目か忘れました。知名度が若干落ちますが、熱狂的なファンの多い映画祭を取り上げます。

＜概要＞（ウィキペディアより）
シッチェス・カタロニア国際映画祭は、スペイン・バルセロナ近郊の海辺のリゾート地シッチェスで毎年10月に開催される映画祭。
「シッチェス映画祭」の略称で親しまれ、日本では「シッチェス・カタルーニャ国際映画祭」と表記されることもある。
国際映画製作者連盟公認の国際映画祭であり、ファンタジー系作品（SF映画・ホラー映画・スリラー映画・サスペンス映画）などが主軸。ただし、アニメーションはオールジャンル）を中心に扱うスペシャライズド映画祭として、世界でも権威のある国際映画祭のひとつ。例年300近い作品が上映される。
1968年に創設されたこの国際映画祭は、世界三大映画祭（カンヌ、ベルリン、ヴェネツィア）とは一線を画し、モントリオール世界映画祭、サンダンス映画祭などと並び世界でも特異な地位を占める。
ジャンル映画祭ではあるが、過去の開催ではほぼオールジャンルの作品がノミネートされている。近年、日本からのアニメーション作品の出品が増加。プロモーションの場として注目が集まっている。
審査員は、著名な映画人や文化人によって構成されている。

日本映画が結構受賞していました。
過去の受賞歴
2010年　三池崇史監督『十三人の刺客』
2009年　細田守監督『サマーウォーズ』
2008年　押井守監督『スカイ・クロラ 』
2007年　三池崇史監督『スキヤキ・ウエスタン ジャンゴ』
2006年　細田守監督『時をかける少女』

＜補足＞
ファンタジー系作品（SF映画・ホラー映画・スリラー映画・サスペンス映画）などを主軸とした映画祭は、シッチェス・カタロニア国際映画祭の他に、ブリュッセル国際ファンタスティック映画祭、ポルト国際映画祭があり、これらをまとめて、世界三大ファンタスティック映画祭と呼ばれています。

ー思い出は、名画とともにいつまでもー。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介していきたいと思います。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

人間賛歌　映画「虹をつかむステージ」

（湊　真帆）

これは、青春ドキュメント映画です。毎年行われる「舞台芸術演劇祭」に参加する東京都の盲学校・ろう学校・養護学校の内、特に東京都世田谷区にある青鳥養護学校の課外活動部である表現活動部を中心に構成されています。20人のやる気のある部員たちが、顧問の渡部先生のオリジナル脚本ミュージカル「葉っぱのフレディ」（原作はアメリカの哲学者、レオ・パスカーリア）の脚本を手にしてから舞台に立つまでの1年間を追います。

ドキュメンタリー性の強いこの映画では、実際の生徒や先生たちの一生懸命で無心な姿、悔し涙、励まし合う。愛情のやり取り全てが本物であり、私たちが日常で経験している人生そのものを映し出しています。無心に、そして一丸となって懸命にミュージカルに取り組む青鳥養護学校・表現活動部の１年の喜怒哀楽を、その自然の輝きを損なわないように制作されたこの映画は、まさに全ての人間へのラブレターです。

映画は、部活の顧問である渡辺先生が自作の脚本を生徒に配り、台本を全員で読むところから始まります。まだ、文字を追うのがやっとの彼女・彼等たち。漢字の読み間違えもご愛嬌。和やかな雰囲気が広がります。配役オーディションを迎えるころ、まだ台詞は棒読みの中、目当ての役を得るために、お互いがそれぞれの良さを認め合いながら切磋琢磨していきます。懸命に先生の指導に沿って役を自分のものにしようとする生徒たち。そこへ、先生方が悩みぬいて仮決定した配役が告げられます。役を逃した生徒たちは小さな挫折を味わい、その挫折を乗り越えて、新たな配役を喜んで受け入れ、自分の役目を誠心誠意・全身全霊で全うします。それぞれが、それぞれに与えられた役を全うしようと懸命に生きる。まさに、生徒たちが演じた、葉っぱたちそのものなのです。

人の生きざまは、こんなにも美しい。私たちも自分たちの役目を全うしようではありませんか！

■新規会員のご紹介
（2011年4月1日～2011年6月31日までにご入会いただいた方々です。）

［正会員］・南 幸久（埼玉県川越市在住）・菊地初江（神奈川県相模原市在住）・滝川まき子（東京都練馬区在住）
・丸山茂徳（東京都新宿区在住）・布施千鶴子（東京都多摩市在住）・河原崎晴美（埼玉県川口市在住）
・今野正隆（千葉県柏市在住）・木野ゆずき（埼玉県入間郡在住）・山本博子（東京都江東区在住）

■ したまちコメディ映画祭、今年もやります！音声ガイド付き上映！

毎年、音声ガイドをつけてくださっているしたまちコメディ映画祭（したコメ）。すっかりおなじみになりましたが、最新ニュースが飛び込んできましたのでお知らせします！なんと今年は、ワールドプレミアにもなっている、オープニング上映に音声ガイドがつくことが決定しました！開催日時は、９月１７日（土）の夕方。会場は浅草公会堂です。上映作品名はまだ明かすことができませんが、劇場公開前の最新邦画コメディを上映するとのこと！！今から楽しみですね。皆様、必ず予定をあけておいて下さい。

編集スタッフ・イラスト描きやレイアウトデザインのスタッフも大募集！希望の方は会報編集課まで！

（会報編集課　ノンちゃん）

この編集後記を書いているのは6月18日。実は締め切りを１日過ぎてしまって、またもや編集長からお叱り？のメールをいただいてしまっております。そんな前置きはともかく。今日は久々に2本続けて映画を観てきました。是枝裕和監督の「奇跡」と、同行鑑賞会の「ブラック・スワン」でした。時間がちょうど良いということに加え、「奇跡」は監督のティーチインがあると知って即チケット予約。けれど、よくよく考えるとこの組み合わせはかなりのでこぼこ。片や子どもたちを主人公としたほんわかじんわり優しい作品。片やプレッシャーに押しつぶされそうになって幻覚まで見てしまう痛々しいお話。でも、どちらも人の心の変化について、いろいろと考えさせられる作品であったことには違いない気もします。

是枝監督のティーチインの中で、ある観客が「○○とは何を意味していたのでしょうか？」と質問。それは実は一つの正解があるというものではなく、観た人それぞれに感じて欲しいと言った種類の台詞だったのだと思われます。なので監督のお答えも明確なものではなかったのは当然。これを聞いちゃねえということです。私の中には私なりの漠然とした意味があり、それがこの作品の良さだったように思えています。

私は観る人それぞれが、そして、観る時々によって感じ方の幅のある映画が好きです。そうした映画に出会うと観終わった後に話がしたくなるからかもしれません。それが原作なしの監督のオリジナル作品であればなお良いという感じでしょうか？これからも、そうした種類の作品に1本でも多く出会いたいものです。

（会報編集課　吉川）

みなさんこんにちは。震災が起きて、もうすぐ4ヶ月。そして今年も半分終わり。時がたつのは本当に早いですね。勤め先の会社が夏の節電対策として、土曜出勤・月曜休みという方針を決めました。ワーキングデイの移動がどれくらい効果あるかはわかりませんが、できることをやってみるのが大事なのかな、と思っています。

先日、「ブラック・スワン」を見てきました。ショッキングなシーンが多かったけれど自分は満足しています。映画にアブノーマルなものを求めている自分としては、本作は見てよかった部類に入りました。ダンサーっていう職業の過酷さや異常性がしっかり描かれており、最初から引き込まれっぱなしでした。怪我が絶えないし、絶え間ない努力が要求されるし、ライバルにおびえながら生きていく。なぜそこまでしてダンサーを続けるのかなと疑問をもちつつも、ダンスというのはそれだけの魔力があるお仕事なのかなとも思ったりしました。最初に書きましたが、今年もあと半分。よい作品との出会いに期待しています。

お忙しい中、今回の会報作成にご協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は10月10日。投稿される方は、9月第2土曜日までにお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス＜kaihou@citylights01.org＞まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

２０１１年　夏号　７月１０日発行　編集：吉川俊平　斉藤恵子　イラスト：石坂春香
発行者：バリアフリー映画鑑賞推進団体　シティ・ライツ
事務局：〒114-0016　東京都北区上中里　1-35-15　TEL&FAX　03-3917-1995
E-mail　mail@citylights01.org　URL　http://www.citylights01.org